

若菜下巻の本文検討

——明融本と横山本の比較——

山 本 ト シ*

(1990年1月8日受理)

源氏物語の伝本の三つの系統のうち、最も重要視されているのは青表紙本系統であるが、この系統の諸本は、従来、現存する四帖を含む種類の藤原定家書写の本を源として伝写されたものと信じられてきた。しかし、近年、片桐洋一氏¹⁾によって、定家の源氏物語書写は、彼の生涯の中で一回のみではなかったことが証明された。片桐氏は、現存定家本以外の、定家が校訂した本の一つとして、自筆本『奥入』に残る源氏物語巻末の本文を挙げられ、それが現存定家本とは一致せず、横山本等の鎌倉期古写本と一致する箇所があることを示されたのである。

片桐氏の論を承け、吉岡曠氏²⁾は、定家書写本の現存する巻と、定家書写本を臨模した明融本の残る巻、計10の巻について青表紙諸本間の異同を調査され、それぞれの巻における「別系」（現存定家本以外の定家校訂本から伝写されたと思われる本）を提示しておられる。吉岡氏が調査された10巻、延べ58帖の中では、長い巻であることもあって、若菜下巻の横山本が最も大きな異文数を持ち、吉岡氏は横山本をこの巻における別系とされている。そこで私は、若菜下巻の横山本と明融本（この巻の定家書写本は現存しない）の間の異文の実態が如何なるものであるか詳しく見てみたいと思う。

調査の方針は次の通りである。

1. 明融本と横山本の異同を『源氏物語大成』によって検索する。『源氏物語大成』において若菜下巻の青表紙本は、明融本、横山本の他、大島本、榊原家本、池田本、陽明家本、肖柏本、三条西家本が採択されている。明融本と横山本の異同を見る際には、この青表紙諸本の中の本以上の支持がある異文に重点を置き、独自異文は後に考察する。これは上記吉岡論文の方法に従ったものである。³⁾ なお、青表紙諸本の他、『源氏物語大成』所収の河内本と別本も参照する。
2. 訂正のある箇所は訂正後の形を採る。但し、片仮名や朱による訂正は後人の手になると考え、訂正前の形を採る。又、池田本は横山本と非常に密接な関係にあると思われるので、訂正前が横山本と同じであればそれが本来の形と考え、訂正前の形を採る。

3. 音便表記の違い、漢字表記と仮名表記の違い、同語と思われる語の表記の違い（「ゆるらか」と「ゆるゝか」など）は異同と考えない。

上記の方針によって検索すると、若菜下巻の明融本と横山本の異同は250箇所ある。このうち明融本の独自異文は5箇所、横山本の独自異文は40箇所、残りの205箇所が明・横それぞれに他本の支持のある異同である。横山本にとってこの他本とは殆どの場合池田本であって、横山本と池田本のみ共通異文は、上記205箇所中、123箇所にのぼる。

私は、明融本と横山本の異同で、他本の支持のある205箇所を、次のように分類した。

- A 明融本の方が良い
- B 横山本の方が良い
- C どちらとも言えない

Aは103箇所、Bは14箇所、Cは85箇所である。この他に、明・横以外の青表紙本が良いと思われるのが3箇所ある。これらの異同を、考察を加えながら示してゆく。本文は明融本を掲げ、問題とする異同箇所に――線を付し、括弧内に諸本の異同を示す。異文に付す記号は『源氏物語大成』に倣い、「。」は補入、「―」はみせけち、「()」は傍記である。青表紙諸本は上一字の略号を使う。河内本は、御物本、七毫源氏、高松宮家本、尾州家本、平瀬本、大島本、鳳来寺本、国冬本の七本が『源氏物語大成』の校異に採択されているが、この中、六本以上が一致した場合のみ「河」と記す。別本は保坂本、阿里莫本が採択されているが、二本とも一致した場合のみ「別」と記す。各例の末尾の数字は、前が『源氏物語大成』の頁数の下3桁（例 125は1125頁のこと）、後が行数である。

二

A 明融本の方が良い

明融本と横山本の異文で、双方に一本以上の支持のあるもののうち、明融本の方が良い、或いは横山本は誤りと判断した103箇所を掲げる。助詞、助動詞、敬語、その他の語の異同の順に掲げる。

- からねこのこゝにたかへるさましてなん侍りし
(大陽神肖三・河一同文、横池一こゝに 127-8)

* 国文学研究室

明融本の「こゝの」の方が、ここ（東宮御所）の猫とは別の猫が大条院にいたことがはっきりわかる。

- としことの春秋のかくらにかならずなかせ世のいのりをくはへたるくわんとも（大陽肖三・河別一同文、横池榊一春秋 135-11）

「春秋の」なら「かくら」を修飾し、「春秋」なら「くはへたる」を修飾する。源氏物語の「春秋」9例中、8例までが「春秋の」の形であり、行事を修飾する例として「春秋のみど経」、「春秋の行幸」があるので、ここも「春秋のかくら」が良いと思う。

- さまさまの御ほうふくのこといもの御まうけのしつらひなにくれとさまことにかはれることゝもなれは（大陽榊肖三・河別一同文、横池一さまさま 144-16）

横山本に従うと「さまさま」は「さまことにかはれる」にかかるが、これでは「なにくれと」と重複することになるので、「さまさまの」の方が良いと思う。

- 秋のよのくまなき月にはよろつものとゝこほりなきに（三・河一同文、大陽榊肖一よろつものゝ、横池一よろつもの 155-7）

横山本に従うと「よろつ」は連用修飾語ということになる。しかしこの語は「よろつ」「よろつに」の形で用いられる場合が圧倒的に多く、次には「よろつ」単独で体言として主語や目的語に使われることが多い。横山本のような使い方はごく少ない。従ってここも用例の多い「よろつ」が良いと思う。

- 下らうのかういはらにおはしましければ（大陽榊肖三・河別一同文、横一下らう、池一下らうに 172-4）

「下らうわらはべ」「下らう女ばう」「下らうほふし」「下らうさぶらひ」の語があるが、更衣については「下らうの更衣たち」（桐壺5-3）の例があるので、明融本が良いと思う。

- きのふたゝねし給へりしおましのあたりを（大陽榊肖三・河一同文、横池一昨日の 195-8）

明融本の「きのふ」は「うたゝねし給へりし」にかかるが、横山本の「昨日の」は「おまし」にかかる。修飾語と被修飾語が直続している前者の方が自然だろう。

- しはしかりそめに身をやつしけるむかしの世のをこなひ人にやありけむ（大陽榊肖三・河一同文、横池一しはしは 136-2）

助詞「は」は承ける語をとり立てて明示、強調する（三省堂『例解古語辞典』）。ここは明石入道に対する源氏の想像であるが、「しはし」の語を「は」によって強調する必要はないように思う。

- 大将もこゑいとすくれたまへる人にて（大陽榊肖三・河一同文、横一こゑは、池一こゑは 152-10）

助詞「は」について松尾聡氏⁴⁾は、「他の事物を排斥して、ある事物を判然と指定する意をもつ。」と述べておられる。横山本の「こゑは」だと、声だけが強調され、声以外のものはすぐれていないことをも言外に含んでいるように受けとれる。明融本などの「こゑ」とのみある方が良いのではなからうか。

- これよりおほけなき心はいかゝはあらむ（大陽榊肖三一同文、横池一いかゝ 174-7）

- いづくにかはをかせ給てし（大陽榊肖、河一同文、横池三一いづくにか 196-9）

上の2例とも小侍従の言葉である。「は」のある明融本の方が、前の例は反問、後の例は疑問の意が強く、この場面における小侍従の気持ちをよく表している。

- 春秋の行幸になむむかし思ひいてられ給事もましりける（大陽榊肖三・河一同文、横一行幸にも、池一行幸にも 142-2）

この文の前に「入道のみかとは御をこなひをいみしくし給て内の御事もきゝいれ給はす」とある。朱雀帝は春秋の行幸の際にのみ往時を思い出すのである。横山本の「行幸にも」では、この記述と矛盾する。

- けにかゝる御うしろみなくてはましていはけなくおはします御ありさまくれなからましと人々もみたてまつる（大陽肖三・河別一同文、横池榊一人々 148-3）

前文には、女三宮について「いみじくかたなりにきひは」、「ほそくあえかにうつくしくのみみえたまふ」とあり、又「（源氏が）事にふれてをしへきこえたまふ」とある。それらを承けて上の文があり、女房たちの眼にも女三宮の幼さが映る、というのだから、「人々も」の方がよい。

- さらはかきりにこそはとおほしはつるあさましきになにことかはたくひあらむ（大陽榊肖三・河別一同文、横池一なにことをかは 184-4）

横山本の「を」は間投助詞ともとれるが、中古の間投助詞「を」について松尾聡氏⁴⁾は、連用の文節につき、文の結びは願望、命令、決意などの表現となるのが普通、と説いておられる。当例の結びは推量である。「を」は衍字と考えるのが妥当ではなからうか。

- なほこの道ははなれかたくて宮に御ふみこまやかにてありけるを（大陽榊肖三・河別一同文、横池一宮にも、208-6）

宮以外の人に手紙をやったという記事はないので、「宮に」が正しい。

- いかてさる山ふしのひしり心にかゝることゝもを思ひよりけむ（大陽榊三・河別一同文、横池肖一事とも 136-1）

- いとかたしけなかりける身のすくせの程を思ふ

(大陽榊肖三・河一同文、横池一ほと 139-6)

- 兵部卿宮の御ひわなとをこそこのころのめつらかなるためにひきいて待めれ(大陽榊肖三・河一同文、横池一なとこそ、156-11)
- 大将のはゝ君をおさなかりしほとにみそめて(大陽肖三・河別一同文、横池榊一はゝ君 165-11)
- 二条の内侍のかむのきみを猶たえす思ひいてきこえ給へと(大陽榊肖三・河別一同文、横池一きみは 203-14)

上の5例は、明融本にある助詞「を」が横山本にはないものである。目的格を表す「を」は必ずしも使われなくてよいが、上記5例の場合、「を」のある明融本の方が目的語がよりはっきりする。特に後の2例は「を」がないと、目的語と主語を混同する恐れがある。

- 人の御心もなくさみなむ程にを(大陽榊肖三・河一同文、横池一をも 200-11)

「なくさむ」(四段動詞)は源氏物語に45例あり、すべて自動詞として使われている。従ってここも「心」が「なくさむ」の主語になっていると考えるべきであり、「を」は必要である。

- かたのことくなんいもの御はちまいるへきを御賀なといへはこととしきやうなれと家においゝつるわらはへのかすおほくなりけるを御らんせさせむとて(大陽榊肖三・河別一同文、横池一まいるへき 213-14)

この文の主文脈の意味を辿れば「形ばかり精進のお膳をさし上げるべきですが、御賀だということで子供達の姿を御覧に入れようと思って」ということになる。「を」は逆接の接続助詞としてこの文に不可欠と思う。

- 女御のきみにもたいのうへにも琴はならはしたてまつり給はさりければ(大陽榊肖三・河別一同文、横池一きみも、池一きみにも 146-3)
- とあることかゝることうちなひき(大陽榊肖三・河別一同文、横池一かゝること 181-10)
- おほかたの人めにこそなへての人にはめてらるれ(大陽榊肖三・河別一同文、横池一めこそ 191-5)

上の三例は、明融本にある助詞「に」が横山本にはないものである。いずれも「に」が必要な文である。

- ひかひかしきやうに院にもきこしめさむを(大陽榊肖三一同文、横池一・別一院も 213-3)

「院」は源氏を指す。建物を貴人の尊称に使う場合、普通は「に」が必要であろう。

- かの院はほとりのおほちまて人たちはきたり(大陽榊肖三・河別一同文、横池一院には 183-13)

この「院」は源氏その人を指すのではなく、源氏の邸を指すので、「に」は必要ないと思う。

- 心にまかせてかきたて給へる(大陽榊肖三・河別一同文、横池一まかせ 157-1)

状態・動作の共存を表す「て」は必要だと思う。

- とし月にそへてくちおしくもつらくもむくつけくもあはれにも色々にふかくおもふたまへまさるに(大陽榊肖三・河別一同文、横池一そへ 177-11)
- 源氏物語中に「年月にそへて」は15例、「年月にそふる」は1例、すべて異文はない。「年月にそへ」は0。類例が15ある「そへて」の明融本が良い。

- 女官をはかしてまりをきたるさまにもてなしきこえて(大陽榊肖三・河一同文、横一さまにて、池一さまにて 182-11)

横山本の「かしこまりをきたるさまにて」だと、柏木の態度を言っていることになり、女三官をどのように「もてなし」たのかが表現されないことになってしまふ。

- けふはあをいろにすわうかさねかく人三十人今日は白かさねをきたる(大陽榊肖三・河別一同文、横池一すわうかさねて 216-5)

「すわうかさね」は舞人の着る下襲の色目を言っており、楽人の「白かさね」と対をなす記述だと思われるので、明融本が良い。

- かのありしねをだにえてしかな思事かたらふへくはあらねとかたはらさひしきなくさめにもなつけむとおもふに(横一えてしかなと、池一えてしかなと 129-6)

「かの」から「なつけむ」までをひとつづきの心内語とする明融本の方が良い。

- けしきにてももりきかせ給事あらはとかしこまりきこえ給しものを(大陽榊肖三・河一同文、横池一あらは 196-14)

「あらは」までが柏木の心中なので「と」がある明融本が正しい。

- かうまでもいかてきこえしとおもへと(大陽榊肖三・河別一同文、横一いかてか、池一いかてか 209-5)

横山本の「いかてか」は反語の意になることが多く、明融本の「いかてきこえし(何とか申し上げずにすませたい)」とは逆の意味になってしまう。ここには明融本の意味がふさわしい。

- それさへそかたき事なりける(大陽榊肖三・河別一同文、横池一と 126-11)

横山本は明らかな欠陥本文である。

- はふりこかゆふうちまがひをく霜はけにいちしるき神のしるしか(大陽榊肖三・河別一同文、横池一は 140-8)

「はふりこかゆふ」の「が」は所有を表す。横山本の

「は」では意味をなさない。

- あま君のおまへにもせんかうのおしきにあをにひ
のおもてをりてさうし物をまいるとて（大陽榊肖三
・河別一同文、横池一は 141-6）

この文は、明石尼君に、他の方々と同様に食事が供されたことを言っている。尼君にだけ浅香の折敷や青鈍の表が出されたことに重点が置かれてはいない。明融本がよいと思う。

- まことはさはかりよになき御ありさまをみてま
つりなれ給へる御心に（大陽榊肖・河別一同文、横
池三—まことに 175-5）

「まことに」だと、「よになき」にかかることになるが、ここは、小侍従の怒りに押された柏木が前的大胆な言葉を翻して、ささやかな望みを述べるところだから、その発語として「まことは」がふさわしい。

- このころそ御心とゝめてをしへきこえたまふ（大
陽榊肖三・河別一同文、横池一は 145-10）

「そ」も「は」も「このころ」を強調しているという点では同様だが、前に松尾氏の説明を引用したように、「は」なら、他の事柄を排する気持がこもる。源氏はこれまで女三宮に熱心に教えていなかった、ということをはっきり述べた文があれば「は」でもよいが、ないので明融本等の「そ」が良いと思う。

- いみしくおほゆることそ人ににさせ給はさりける
（大陽榊肖三・河別一同文、横池一ことは 178-8）

文の結びが連体形だから「そ」が正しい。

- みこたちはのとかにふた心なくてみ給はむをたに
こそはなやかならぬなくさめには思ふへけれと（大
陽榊肖三・河別一同文、横池一ぬ 132-8）

- ある世にかはらむ御ありさまのうしろめたさによ
りこそなからふれ（大陽榊肖三・河別一同文、横池
一ぬ 135-3）

上の2例は、予想の助動詞「む」が、横山本では打消の助動詞「ぬ」になったものである。「ぬ」では文の意味が通らない。

- このをりをさをさきゝなれぬ手ともひき給らんを
ゆかしとおほして（大陽肖三一同文、横池・河一給
はん、榊一給へらん 146-4）

横山本では未来推量の形になっているが、「このをり」という現在を表す語があるので、明融本又は榊原本の現在推量の形が良いと思う。

- かのこまかなりし返事はいとかくしもつゝますか
よはし給らむかし（大陽榊肖三・河別一同文、横池
一給はん 211-2）

「かのこまかなりし」は源氏がかつて見た柏木の艶書を指す。艶書を見たのは六月、上の文は十月のことであるから、四ヶ月も前の艶書への返事を、横山本のように

「かよはし給はんかし」と未来推量の形で言うのはおかしい。明融本の現在推量の形であれば、源氏は女三宮が日ごろ柏木への返事は気がねもなしにかよわしているのだらうと想像している、と解することができる。

- いうになりにける御ことのねかな（大陽榊肖三・
河一同文、横池一なりける 152-7）

女三宮の琴を聞いての夕霧の心中。明融本の完了の助動詞「に」は、「すっかり優になった」というニュアンスを含み、こちらの方がよいと思う。

- 御こともおしやりてけうそくにおしかゝり給へり
（大陽榊肖三・河一同文、横池一給へる 153-8）

「おしかゝり給へり」で終止すべき文と思われる。係助詞はないので、横山本の「る（連体形）」ではなく、明融本「り（終止形）」が正しい。

- けにのたまひつるやうに人よりことなるすくせも
ありける身ながら（大陽榊肖三・河一同文、横一の
給へる、池一このゝ給え（つ）る 168-7）

源氏が去った後、明石御方が源氏の言葉を思い出しているのだから、存続の「り」が用いられている横山本より、完了の助動詞「つ」が用いられている明融本がよい。

- ひとりおほとのもるよなよなおほく（大陽榊肖
三・河別一同文、横池一れる 173-3）

習慣を言っているので、明融本がよい。

- 御しとねのしたにさしはさみ給つ（大陽肖三・河
別一同文、横池一さしはさませ給つ、榊一さしはさ
みつ 194-3）

横山本では「せ」が入っている。この前後の地の文で女三宮に二重敬語は使われておらず、尊敬の「せ」とはとれない。又、使役ともとれない。「せ」のない明融本が良い。

- いといたくこそはつかしめられたれ（大陽榊三・
河一同文、横池一はつかしめたれ、肖一はつかしめ
られけれ 205-4）

源氏の心内語。横山本に従うと「はつかしめ」の主語である臘月夜への敬語が必要である。

- いとおしくおほしてこのころそ御心とゝめてをし
へきこえたまふ（大陽榊肖・河一同文、横池三—お
ほえて 145-10）

若菜下巻では源氏に対する敬語はほとんど省略されないで、「おほえて」より「おほして」がよい。

- たちならひさまたけきこえさせ給へき御身のおほ
えとやおほされし（大陽榊肖三一同文、横池一きこ
え給へき 174-1）

明融本の「きこえさせ給」は「きこえさせ+給」であり、「きこえ給」に比べて、動作の受手である源氏への敬意が強い表現である。この場面で小侍従は柏木を軽んじ

ており、「きこえさせ給」という言い方は、彼女の、源氏と柏木に対する敬意の差を表すのにふさわしいと思う。

- ねひまざり給にけりと御らんすばかりよういくはへてみえたてまつりたまへと事にふれてをしへきこえたまふ（大陽榊肖三・河別一同文、横池一ねひまざりにけり 148-1）
- 御身つからのうへなれはおほししらすやあらむ（大陽榊肖三・河一同文、横池一みつから 164-12）
- きし方の人の御うへすこしつゝのたまひいてゝ（大陽榊肖三・河一同文、横池一うへ 166-14）
- 仏神にもこの御心はせのありかたくつみかるきさまを申あきらめさせたまふ（大榊肖三・河別一同文、横池陽一心はせ 171-7）
- わかきみの御あやまちをしらぬ人はいふ（大陽榊肖三・河一同文、横池一あやまち 193-10）

上の5例は、明融本にある「御」、「給」の敬語が、横山本にはないものである。5例とも、女三宮、紫上、六条御息所などに関する語で、敬語は必要である。

- あはれなるゆめかたりもきこえさすへきを（大陽榊肖三・河別一同文、横一御ゆめかたり、池一御ゆめかたり 180-6）

柏木が自分の夢語りについて述べているのだから、敬語があってはおかしい。

- あなちになむつけたてまつらまほしきにやあらむ（大陽榊肖三・河別一同文、横池一つけまつら 202-2）

「まつる」という謙譲の補助動詞は、平安朝には使われない。

- うれたくもいへるかな（大陽榊肖三一同文、横・河一侍かな、池一侍（いへる）かな 125-1）

柏木の心内語である。「侍り」は心内語には使わない。横山本は、「い」を片仮名の「ハ」に誤ったのであろう。

- 花のかけいとゝたつことやすからて（大池榊肖三・河別一同文、横陽一ナシ 125-12）
- かゝる人のいとゝ世になからへて世のたのしむをつくさはかたはらの人くるしからむ（大陽榊肖三一同文、横池一ナシ 187-9）

上の2例は、明融本にある「いとゝ」が横山本にはないものである。第一の例は「今日のみと春を思はぬときだにも立つことやすき花のかけかは」（古今・春下、躬恒）の引歌による表現。源氏物語のこの場面は三月晦日の日なので、「今日のみと春を思はぬ」日と比べて一層、という意の「いとど」がある方がよい。

第二の例も、人柄のすばらしさの上に長命が加わることを意味する「いとど」のある方がよい。

- ひめ君の御おほえなとてかはかるくあらん（大陽榊肖三・河別一同文、横池一ひめ宮 130-2）

「ひめ君」とは真木柱のことを指しているの、「ひめ宮」はおかしい。

- かゝるあたりにてきゝ給はむことも心つかひせらるへくなとおほす（大陽榊肖三・河一同文、横池一なんと 132-4）
- わたくしさまに心をやりてのとかにすきまほしくなむとところおほしのたまはせつるを（大陽肖三一同文、横池榊・河一なと 133-3）
- いとほしくくやしき事もおほくなときし方の人の御うへすこしつゝのたまひいてゝ（大陽榊肖三・河別一同文、横池一なと 166-14）
- いとくるしくなむなどのたまへは（大肖三・河一同文、榊一くるしうなん、横池一くるしく、陽一くるしなむ 200-5）

上の4例は、係助詞「なむ」に関する異同である。「なむ」は会話に使われるのが普通であるが、第一の例は横山本に従うと「おほす」で承けとめられる心内語に使われていることになってしまう。第二、三、四の例は、明融本では「すきまほしくなむ」「おほくなん」「くるしくなむ」と、会話の最後が「なむ」で終わり、それが「と」や「など」で承けられて地の文へ続いてゆく形である。一方横山本だと「すきまほしく」「おほく」「くるしく」で会話が終わり、「など」で承けとめられて地の文へ続いてゆく。

川越園子氏によれば⁹⁾、鎌倉時代の初めには係助詞「なむ」は大体滅びたので、その頃書写された河内本には、係助詞「なむ」を、完了の助動詞「ぬ」の未然形「な」に予想の助動詞「む」が付いた「なむ」や、副助詞「など」の撥音化した「なんど」と間違えて写した箇所が多くあるという。上の第二、三、四の例は横山本に従っても文意は通るが、河内本の場合と同様、横山本の書写者も係助詞「なむ」に対して無理解であったため、会話の最後から地の文に移る「なむと」の部分を「なと」に変えたり、「なむなど」の「なむ」を省いたりしてしまったのではなかろうか。

- しけいさなのうとうとしくおよひかたけなる御心さまのあまりなるに（大陽榊肖三・河一同文、横池一ことごとしく 129-6）

夕霧から見た淑景舎（明石姫君）の様子を言っている。横山本の「ことごとし」は、大がかりであること、仰々しいことで、この文にあてはめた場合に意味不通ではないが、「うとうとし」には、親しかるべき近親者が疎遠であることに用いた例が多数あり、こちらが正しいと思われる。

- なさけなさけしう心ふかきさまにのたまひわたりしをあえなくあはつけきやうにやきゝおとし給けむ（大陽榊肖三・河別一同文、横池一あやなく 132-

3)

鬚黒と結婚した後の玉鬘が、螢宮の思わくを付度する心内語である。明融本の「あへなし」は、『岩波古語辞典』によれば、「(今となっては) どうしようもない、(対処しようにも手ごたえもなく) はりあいが無い、あつけない」等の意。横山本の「あやなし」は、「わけがわからない、意味がない、無考である」等の意である。熱心に求婚していた螢宮が玉鬘の結婚を知った時の気持ちとしては、「あへなし」がふさわしいではなからうか。

- あえなくあはつけきやうにやきゝおとし給けむ
(大椿三・河別一同文、横池一きゝおとしめ、陽一きゝ、132-3)

源氏物語には、「きゝおとす」も「きゝおとしむ」も当例以外にはない。「おとす(貶)」は独立した動詞として8例、「いひおとす」「きこえおとす」「おもひおとす」「おほしおとす」「みおとす」という複合動詞として36例ある。「おとしむ」は独立した動詞として12例あるが、複合動詞としては「いひおとしむ」の1例しかない。複合動詞として用例の多い「きゝおとす」が正しいと思う。

- たゝはしりかきたるおもむきのさえさえしくはか
はかしくほとけ神もきゝいれ給へきことのはあきらかなり
(大陽椿三・河一同文、横一はつかしく、池一はつ(かゆきて)かしく 135-14)

漢文で書かれた願文についての評である。「さえさえし」、「はかはかし」という同趣の二語を並列させた、と考えてよいのではないか。

- くはゝりたるふたりなむ近衛つかさの名たかきか
きりをめしたりける
(大陽三・別一同文、横池椿三・河一兵衛 136-14)

住吉詣でに同道する楽人についての叙述である。和田英松著『官職要解』に

- ・ 近衛舎人ありけり、神楽舎人などにてあるにや、歌をぞいみじくよみけり。(今昔物語)
- ・ 神楽は近衛舎人のしわざなり。(続古事談)

という記事が紹介され、又、「舞人、楽人をもって(近衛府の)将監以下に任じたのが多く、のちには音楽のほうが本務ようになった」とも述べてある。源氏物語松風巻にも、

- ・ 近衛つかさの名高き舎人ものゝふしともなときふらふにさうさうしければそのこまなと乱れあそびて
(596-12)

とあり、こゝも「近衛」が正しいと思う。

- ましらはましもみくるしくや
(大陽椿三・河一同文、横池一みくるしや 141-12)

仮定の助動詞「まし」に呼応する結びとしては、横山

本のような確定的な形ではなく、明融本の「みくるしくや(あらむが省略)」という推量の形が良い。

- あをにゝやなきのかさみえひそめのあこめなど
(大陽椿三・河一同文、横三あをきに、池一あをきにゝ 149-4)

「あをに」又は「あをき」は舞人の表着についての語である。横山本の「あをき」は、源氏物語では、絵巻物の表紙、色紙、造花の蓮、木の枝を修飾する語として用いられており、表着について用いられたのは「あをきあかきしらつるはみ」(藤葉集1018-2)のみである。この例の解釈については、古来不審とされている。表着の色について「青色」は使うが、「あをし」の語は使われないと思われる。明融本の「あをに」は源氏物語にはここ1例だが、古語辞典には「襲の色目の名」とあり、表着の色目についての語として適当と思う。

- 春のそらのたととしきかすみのまよりおほるなる
月かけにしつかにふきあはせたるやうにはいかてか
(大陽椿三・河別一同文、横池一花 155-9)

こゝは夕霧が琴笛の響きについて、秋と春を対照的に論じている箇所であるから、少し前にある「秋のよの」に対して「春のそらの」と、「春」という季節をはっきり表現した明融本の方が良いと思う。この文の直前には、秋の花について「花のつゆにも色々めうつろひ心ちりて」と述べており、横山本の「花のそら」では、どの季節の空について言っているのかはっきりしない。

- 三宮いまよりけしきありてみえたまふを
(椿・河一同文、大横陽三・別一二宮、池一三(二)宮 159-9)

「けしき」は、琴の才がありそうな様子を言う。二宮に関する記事はこの他に若菜下、横笛、勾宮、蜻蛉巻にあるが、音楽の才能に触れたものはない。三宮(勾宮)については、紅梅巻で大納言が琴について語る言葉の中に「源中納言、兵部卿宮、何ごとも昔の人に劣るまじういと契りことにものしたまふ人々にて、遊びの方はとり分きて心とどめたまへるを」とある。琴の技量について触れた記事が後の巻にある「三宮」がよいのではなからうか。

- いまの世のおほえありさまきしかたにたくひすく
なくなむありける
(大陽椿三・河別一同文、横池一なく 164-1)

源氏が自分の栄耀を言うのに、たぐいが「ない」というより、「少ない」という控えめな言いの方が自然だろう。

- むねふたかりておほしをほほるゝを
(大椿三一同文、横池陽一おほしおほるゝ、肖一おほさるゝ 178-14)

「おほる」は蜻蛉巻に「水におほれ」の1例があるの

み。「おほほる」は源氏物語中に複合語を含めて11例、「おほほる」が「おほる」となる校異はない。これも明融本の「おほしをほほる」でよいと思う。

○ みかとの御めをもとりあやまちて（大陽榊肖三・河一同文、横一もとより、池一もとより 181-5）
「もとより」という副詞は、「もとよりあつしくおはします」（若菜上1025-1）、「中納言はもとよりまめ人にて」（同1032-11）などの用例に見られるように、継続的な状態や性情を言う時に使う。それに対して「あやまつ」は、むしろ短期間、短時間のうちになす動作を言う動詞である。「もとより」と「あやまつ」の取り合わせはおかしいのではないか。

○ かはかりおほえむことゆゑはみのいたつらにならむくるしくおほゆまししかいちしるきつみにはあたらずとも（大陽榊肖三・河別一同文、横一おほゆましきか、池一おほゆる（ましき）か 181-7）

横山本では意味が通らない。

○ かしらよりまことにくるけふりをたてゝいみしき心をゝこしてかちしたてまつる（大陽榊肖三・河一同文、横一ことに、池一まことに 184-9）
験者が懸命に加持をする様子。頭から黒煙を立てるなど普通にはあり得ないことだから、「まことに」がよい。

○ 物の心くるしさをえみすくさてつるにあらはれぬることさらにしられしと思つる物を（大陽榊肖三・河一同文、横池一みすくさて 185-6）
引用部分の後半「さらにしられしと思つるものを」から考えて、「え……で」という不可能の意のある明融本が良い。

○ けふのかへさみにいて給ひけるかむたちめなど（大陽榊肖三・河別一同文、横池一かの、187-5）
前に「まつりのひなどは」（1182-9）とあり、「けふのかへさ」は、賀茂祭翌日の斎王の帰還を意味する。「かの」は何を指すか明らかでなく、不必要な語ではないだろうか。

○ 式部卿宮もわたり給ていといたくおほしほれたるさまにてそいり給（大陽榊肖三・河別一同文、横一まいり、池一まいり 188-3）

明融本の「いり」は建物内に入ることを言うのだろう。「まいり」だと、前にある「わたり」と重複する。

○ ひめ宮はあやしかりしことをおほしなけしきよりやかてれいのさまにもおはせすなやましくし給へと（大陽榊肖三・河別一同文、横池一れいさま 191-1）

横山本の「れいさま」は、明石中宮が勾宮に言う言葉「御心につきておほす人あらばこゝにまいらせてれいさまにとやかにもてなし給へ」（総角1643-11）に1例あるのみである。明融本の「れいのさま」は源氏物語に4

例、すべて否定を表す語と共に用いられて常の健康状態ではないことを意味する。ここは女三宮が懐妊したことを言っており、用例にてらして「れいのさま」は適切な語句である。

○ かくいとおしき御身のためも人のためもいみしきことにもあるかな（大陽榊肖三・河一同文、横池一ナシ 202-4）

「人のためも」を除くと、その前の「御身のためも」の「も」がなぜ使われているのかわからなくなる。この「も」は付加の意であり、次に「人のためも」があるからこそ使われているのである。

○ 心つよからぬあやまちはしいつるなりけり（大陽榊肖三・河別一同文、横池一しつる 203-4）

一般論を言っているのだから、「しつる」はおかしい。

○ ゑかうにはあまねきかとにてもいかゝは（大陽榊・河別一同文、横池一かこと、肖三一かた 205-1）
「あまねきかと」とは、法華経にある「普門」を和語にしたものであり、明融本が良い。

○ 心くるしき御せうそこにまろこそいとくるしけれ（大陽榊肖三・河別一同文、横池陽一まつ 208-14）
あなた（女三宮）宛の手紙だが、あなたより私（源氏）の方が苦しい、という意味の文である。「まろ」が正しい。

○ れいのやうにこまやかにあらてやうやうすへりいてぬ（大陽榊肖三・河別一同文、横池一こまか 215-14）

「こまやか」と「こまか」は似た場面で使われることもあるが、「こまか」が、事が詳細にわたることであるのに対し、「こまやか」は、通い合う情が濃いことを意味するようである。普段の源氏は柏木に眼をかけていたのであるから、試案のこの日、「こまごました話もしないで」と言うより、「愛情のこもった話もしないで」という表現の方が適当ではなからうか。明融本等の「こまやかに」の方が良いと思う。

○ 御賀などいへはこととしきやうなれと家においゝつるわらはへのかすおほくなりけるを御らんせさせむとてまいなとならしはしめしその事をたにはたさむとて（大陽榊肖三・河一同文、横陽一はじめ、池一はじめ 214-2）

「はじめし」の「し」は、「御賀など〜はじめ」全体を受けとめる大切な語であり、「その事」とは、「し」によって統括された「御賀など〜はじめし」を指している。「し」がないと「その事」が何を指すのかははっきりしないし、冗長な文になってしまうと思う。猶、「ことごとしきやうなれど」は挿入句である。

○ たかきいへのこにてかたちおかしけにかしつきいてたる思ひなしもやむことなし（大陽榊肖三・河一

同文、横一おかし、池一おかしけに 216-14)

「思ひなし」とは、高い家柄の子と思う、その「思ひなし」のことである。横山本だと「おかし」で文が切れ、「たかきいへのこにて」と「思ひなし」の語が二文に分かれることになり、この関係が明らかでなくなってしまう。

- なかく世に侍りてかひなき身のほともすこしひとゝひとしくなるけちめをもや御覽せらるゝとこそおもふ給つれいとみしくかくさへなり待へれば (大榊肖三・河一同文、陽一なり侍つれば、横池一侍へれば 219-6)

長生きをし、人並みに出世したところを見てもらいたいと思っていたのに、という意の文が前半にあるのだから、状態が変化したことを表す動詞「なり」があった方がよい。又『岩波古語辞典』によれば、動詞「成る」は、「つ」「ぬ」二つの完了助動詞のうち、「ぬ」だけが承けるという。従って、陽明文庫本の「なり侍つれば」の「つ」は「へ」を誤ったのだと思われ、明融本等がよい。

- さるなからひとといふなかにも心かはしてねんころなれば (大榊肖三・河別一同文、横池一事 126-5)
- かへるなみにきほふもくちおしく (大榊肖三・河別一同文、横一かへるなみた、池一かへるなみた 141-2)
- いにしへより人のわきかねたることをすゑの世にくたれる人のえあきらめはつましくこそ (大榊肖三・河別一同文、横池一すくれたる 155-14)
- むかしよりかくいのちもたふましく思ふことを (大榊肖三・河別一同文、横池一たゆ 172-14)
- 女御かういといへと (大榊肖三・河別一同文、横池一女院 198-10)

上の5例は、明融本の語が横山本では別の語になっているものであるが、いずれも横山本では意味が通らない。

- かたきことなりかし (大榊肖三・河別、横一かたこと、池一かたこと 141-11)
- いかしことくとゝのひてこそ侍りつれ (大榊肖三・河別一同文、横池一こと 157-2)
- いとよくわきまへたまへるをいとうつくしくおもたゝしく思ひきこえ給 (大榊肖三・河別一同文、横池一うつくしおもたゝしく、榊一うつくしうおもたゝしう 16-010)
- おのつからせさせてむ (大榊肖三・河別一同文、横一せさせてむ、池一せさせてゝん 163-11)
- ひゝとひそひおはして (大榊肖三・河別一同文、横池一日ゝとい 169-4)
- いまはをこたりはて給にたる御あつかひに心をい

れ給へること (大榊肖三・河別一同文、横一いれたまつる、池一いれ給つる 197-7)

上の6例の横山本は、誤字又は脱字のための欠陥本文である。

B 横山本の方がよい

他の青表紙本の支持のある、明融本と横山本の異同のうち、横山本の方がよいと判断されたのは、次の14箇所である。

- ひめ宮の御方に侍ねこそいとみえぬやうなるかほしておかしうはへしか (三一一同文、大横池陽榊肖・河別一ねこそ 127-6)

文の結びが已然形だから、助詞「こそ」を使った横山本等が正しい。

- えしもいひすへし給はておはしましそめぬ (大榊肖三・河一同文、横三・別一すくし 131-1)

『大成』の索引では「いひすへす」は当例のみ、「いひすくす」はない。「すべす」の複合語は「ぬきすべす」4例、「まぎらはしすべす」1例がある。前者は唐衣、薄衣などを脱ぐこと、後者は衣を音をたてないようにそっとぬぐことであり、「すべす」は衣をぬぐ意と思われる。一方、「すぐす」の複合語は「えりすぐす」「おもひすぐす」「ききすぐす」「知りすぐす」「たのみすぐす」「なかめすぐす」「みすぐす」「みききすぐす」等、多数があり、「……すぐす」は「……して過ぐす」又は「……してそのままにして過ぐす」の意と思われる。当例は、前に「このわたりに気色ばみ寄り給へれば」とあるのを承けて、「えいひすぐし給はで」(求愛のそぶりをみせてそのままにしておくこともできないで)と言うのであろう。「すくし」が良いと思う。

- わたくしさまに心をやりてのとかにすきまほしくなむとしころおほしのたまはせつるを (大一同文、横池陽榊肖三・河別一すくさまほしく、133-3)
- 人が時を過ぐす、暮らす意には、「すぐ」ではなく「すぐす」を使うから、明・大以外の「すくさまほしく」が正しいと思う。薄雲巻にも、冷泉帝が退位を希望して「いまは心やすきさまにてもすくさまほしくなむ」(622-5)と述べるところがある。

- みことにうちあはせたるひやうしも (陽一同文、大横池榊肖三・河一こと 138-3)

住吉社頭の神楽なので「み」という敬語が付いたとも考えられるが、この場面、他の楽器は「ふえ」「ひやうし」「つゝみ」と敬語がないので、こども「こと」が良いと思う。

- 山あるにするたけのふしは松のみとりにみえまかひかさしの色々は秋のくさにことなるけちめわかれて (大一同文、横池陽榊肖三・河別一かさしのは

な 138-6)

「かさし」だけでも髪や冠に挿す草木や花を意味するので明融本でもよいが、この前後には「たけのふし」「松のみとり」「秋のくさ」という、細部に及んだ表現があるので、これらに釣り合う言い方としては「かさしのはな」が良いと思う。

- あるましくおほけなき心ちなどはさらにものし給はす (大一同文、横池榊陽肖三・河別一心 155-3)

『岩波古語辞典』では「こち」を説明して「類義語ココロが積極的に対象に向う意向・意志などの働きに中心があるのに対して、事態からその場で受ける気分・感じ」とある。「おほけなし」は人間の心の働きを形容する語であるから、人間の感情面を言う「こち」より「ところ」と結びつくのが自然だと思う。源氏物語に「おほけなき心」は10例あるが、「おほけなきこち」は当例以外にない。

- えあきらめははつましくこそ (大一同文、横池陽肖三・河一えあきらめ、榊一えあきらめ 155-14)

「はつ」という動詞が他の動詞の連用形について、その動作が終極に達する意を表す時には、助詞「は」を介さないのが普通と思う。

- をもしとみれとをのつからをこたるけちめあらはたのもしきを (大一同文、横池陽榊肖三・河別一あらは 169-9)

「あらは」という仮定条件に呼応する結びは、「たのもしからむ」などの推量形であろう。「たのもしき」に対しては、「あるは」の方がよい。

- つゆにても御心ゆるしたふさまなどはそれにかへつるにてもすて侍なまし (大一同文、横池陽榊肖三・河別一ならは 179-12)

明融本では意味が通じない。

- 人の御せうそこもえ申つたへたまはす (大榊一同文、横池陽肖三一人々の 188-3)

紫上の死の知らせに実父の式部卿宮が、悲嘆の余り、人から託された見舞の挨拶を伝えることができない、という文である。宮は複数の人から託されたのであろうから「人々」が良いのではなからうか。別本は「人々も」、河内本は「人々も御せうそこもえ申つたへたまはす」とあり、共に「人々」が使っている。

- この君のいとさしもしたしからぬまゝはの御こととをいたく心しめたまへるかな (大一同文、横池陽榊肖三・別一に、188-11)

源氏物語中で「心」と「しむ」が共に使われる形としては、「(……に) 心をしむ」7例、「(……を) 心にしむ」7例、「(……に) 心しむ」4例、「しめたる心」1例、「心もしむ」各1例がある。

「心」の後に付く助言として「に」、「を」があるわけ

だが、「に」は略されることが極めて少ないのに対し、「を」は、本来の日本語は目的格には助詞を要しなかったため、省かれることがよくある。だから、当例も含めて5例の「心しむ」にもし助詞を補うとすれば、「心をしむ」となるだろう。すると、当例の「御こと」の後の助詞は「に」が良いことになる。

- かくとしもせめつればえ思ひのことくしあへて (大一同文、横池陽榊肖三、河別一こくも 213-13)

『岩波古語辞典』によれば、助詞「も」は承ける語を不確定なものとして扱うので、否定文の場合は全面的な否定になるという。ここは源氏の謙辞だから「思い通りにはとてもできなくて」という全面的な否定がふさわしい。従って「も」のある横山本等の方が良い。

- かほの色たがふらむとおほえて御いらへもとみにきこえす (三・河一同文、大陽榊肖一とみにえきこえす、横一とみにもえきこえす、池一とみにも(え)きこえ給はす 214-5)

源氏からやさしく言葉をかけられた柏木が、心理的には窮地に立っている場面である。明融本でも誤りではないが、応答しようとしてもできない、という意の「え……ず」の形を持つ横山本や大島本等の方が良いと思う。池田本で補入されている「給は」は、このあたり柏木に敬語は使われていないので、不必要である。

- つりとのにつゝきたるらうをかく所にて (大一同文、横池陽榊肖三・河別一にして 216-7)

横山本等の言い方が正しい。

今まで、他の一本以上の支持のある、明・横の異文のうち、明融本が良いもの、横山本がよいものを挙げたが、明・横以外の本が良いと思われるものが3箇所あるので挙げておく。

- 人よりはこまかにおほしとゝめたる御けしきのあはれになつかしきを (大一同文、陽榊肖三・河一こまやかに、横池一まめやかに 201-7)

「まめやかに」は「まじめに」「真顔で」「真剣に」「実直に」等の意であり、源氏の柏木に対する様子と言うこの場合には適当でない。「こまか」と「こまやか」は似た場面に使われることもあるが、「こまか」は事が細部にわたること、詳細なことであり、「こまやか」は愛情が濃密であることを意味するようである。すると、この場合に最も適当なのは、陽明家本等の「こまやか」であると思う。

- 大将の御ないしのすけはらの二らう君 (陽肖一同文、大・河一御子のないしのすけはら、横一御ないしすけはら、榊一御ないし△けはら、池一御ないしすけはら、216-14) (△は虫損)

横山本、榊原本、池田本の「ないしすけ」は「ないし

のすけ」の誤りだろう。「御」という敬語は「ないしのすけ」にかかるのはおかしく、「子」があるべきだろう。こと同じ典侍が生んだ夕霧の子女は、他の箇所でのように表現されている。

- ・ 大将の御と内侍のすけはらのくはへて三人（若菜下1144-10）
- ・ 内侍はらのきんたちしもなにかたちおかしう心はせありて（夕霧1375-11）
- ・ 内侍のすけ腹の六の君とかいとすくれておかしけに（勾宮1349-10）

第一例は特に当例と似ており、当例も大島本の「御子のないしのすけはら」が正しいと思う。

次の例は、明融本、横山本それぞれに誤りではないが、他本の本文がより良いと思われるもの。

- わさとらうたくせさせたまふ御心にてくはしくとはせ給（大一同文、榊陽肖三一ねこわさと、横池一ねこのわさと、河一ねこはわさと 127-7）

前後に「ねこ」の語があるので、明・大の「わさと」だけでもわかるのだが、「らうたくせさせたまふ」対象である「ねこ」という語を、ここに改めて出すことは必要であると思う。明・大以外の青表紙本、河内本すべてに「ねこ」の語があり、明・大はこれが脱落したとも考えられる。横山本「ねこの」の「の」は、「を」の用法に近い「の」とも考えられるが、松尾氏⁹⁾によれば「こうした用例は、そうむやみとあるものではない」ということである。結局、榊原本などの「ねこわさと」が本来の形だったのではなかろうか。

以上見てきたように、明融本以外が良いと判定したのは計17箇所であるが、このうち14箇所は、明融本と青表紙本の他の一本のみが共通する、いわば明融本の準独自異文である。その、他の一本とは、11箇所までが大島本である。

C 判定不能

「判定不能」とは、明・横どちらの本文でもよいと思われたもの、又は、どちらがよいか判定できなかったものである。このグループの85異文のうち、45は横・池のみの共通異文である。

このグループは数が多いので、今までより簡略な形で用例を掲げる。括弧内には、異文を持つ本とその本文のみを記し、同文のものは省略する。又、河内本と別本についても触れない。説明も省略する。

- おもむきのさえさえしく（横一ナシ、池一の 135-13）
- しのいとこちたくをきて（横池一ナシ 139-12）

- まつりのところ（横一まつり心、池一まつり（神）心 140-4）
- おほかたのけはひのいかめしくけたかきことさへいとならひなし（横池榊一ナシ 149-5）
- 御ことのねのいてはへしたりしも面目ありて（横池一ナシ 163-1）
- みちの程の心もとなきに（横一みちのほとも、池一道程、三一みちのほと 183-12）
- このつみのかるむはかりのわさ（横池榊陽肖三一ナシ 186-11）
- 院のわたらせ給ことも（横池榊一ナシ 191-8）
- おりおりのありしはや（横池一ナシ 192-8）
- かの宮のなやましけにおはすらむに（横池一ナシ 199-12）
- おほよそ人（横池一おほよその人 200-7）
- 心地すれは（横池一心地の 201-12）
- にくき心のそはぬにしもあらざりし（横池一ナシ 203-7）
- 思ふ心のあるにや（横池一ナシ 212-14）
- みこたちにこそはみせたてまつらめ（横池榊一ナシ 130-11）
- わらはへはかたちすくれたる四人（横池一ナシ 148-10）
- かきたて給へるはいとことにものし給へ（横池一ナシ 157-1）
- その方人にすくれたりけるすくせとは（横池榊陽肖一そのかたは、池一そのかたは 164-10）
- したの心わすられず（横池一心は 172-7）
- 宮つきせすわりなきことにおほしたり（横池榊陽肖一宮は 191-3）
- なやみ給なるさまはくはしくきゝしのちねんすのついてにも思ひやらるゝはいかゝ（横池一給なるさま、榊一給さま 208-8）
- いかてかはおほしとゝまらむ（横池一ナシ 221-3）
- かのはしめの北の方をもゝてはなれはてゝ（横池一ナシ 129-8）
- かすしらす（横池一かすも 140-9）
- いづれともなきを（横池三一いづれと 160-13）
- まほならねと（横池一まほならねとも 167-4）
- かゝるおもひもつきそめたるなりけり（横池一思ひ 172-11）
- ものもいはむとし給へと（横池榊一ナシ 180-5）
- すこしをろかに（横池一すこしも 200-2）
- あさゆふすゝみもなきころなれと（横一ナシ、池一も 201-6）
- 世のうしろみにをき給へる（横一うしろみにも、

池一うしろみにも 209-14)

- 人のうらみをもしらす (横池榊一ナシ 166-12)
- もやのみすおろして (横池一みすを 213-4)
- 御きちやうはかりをへたてゝ (横池一ナシ、池は脱文 219-2)
- ものなとをさらにまいらさりけるに (横池三一ナシ 220-6)
- しはのふはかりに (横池一ナシ 137-8)
- あたりにゝほひみちたる心地して (横池一ナシ 153-13)
- いとうつくしくふきたてゝせちに心いれたる (横池一ところに 160-11)
- ねふたくなりたらむに (横池一ナシ 160-12)
- 女のためはさらにもいはず (横一には、池一には 181-3)
- うちなかめかちにのみおはします (横池一にて 132-12)
- あいきやうつきてりむの手なとすへてさらにいとかとある御ことのねなり (横池陽榊三一ナシ 160-4)
- をしへきこゆる事なともなく (横一なくて、池一なくて 162-13)
- このしかくによりそえしつめはてゝわたり給へる (横池一よりてそ、大一よりて 212-5)
- ひさしの中の御さうしをはなちてこなたかなたみ木ちやうはかりをけちめにて中のまは院のおはしますへきおましょそひたり (横一こなたかなたと、池一こなたかなたと 149-7)
- ものにひきいるゝやうにみえ給 (横池陽榊肖三一やうにそ 220-8)
- うとき人のいるへきやうもなきを (横陽一やうは、池一やうも (は) 151-4)
- つみをもき心もさらに侍るまし (横池一は 177-14)
- いさゝかまとろむともなきゆめに (横池一としも 178-11)
- けしきもしり給はぬも (横池一を 182-7)
- いとわかくて院にもひきわかれたてまつりたまひしかは (横陽榊三一給にしかは、池一給にしかは 145-2)
- きむはかりはひきとり給つらむ (大横池三一へ 145-4)
- かすゝくなくなりた^るを (横池陽一なりにた^るを 156-3)
- おほかたにてうちたのまむにもいとかしこかりし人を (横池三一うちたのむにも 163-12)
- いとたとしへなきうらなさをいかに見給らんとつ

ゝましけれと (横一み給つらん、池一み給つらん 167-6)

- なほかの下の心わすられず (横池一わすれず、榊一わすられず、陽肖一わすれぬ 172-7)
- かの院のこといてゝねんころにきこえ給ふに (横池陽榊肖三一給はん 174-1)
- けふのかへさみにいて給ひけるかむたちめ (横池一給にける 187-6)
- あはれなる御すくせにそありける (横一あはれなりける、池一あはれなりける 191-7)
- かくかさねてのたまへれは (横池一の給へは 213-3)
- さうのことは女御の御つまをとはいとらうたけになつかしく (横池一御こと 160-1)
- いみしく御心をつくし給御事にうちそへて (横池一心 181-14)
- 御かたはらにそひてなみたおしのこひ給ひつゝ (横池陽榊肖三一そひる給て 189-12)
- 心の中にあなちにおこかましくかつはおほゆるにこれをたつねとりて (横池陽榊肖一おほゆるに、大一おほゆるつるに 128-7)
- おほしのたまひて (横池陽肖三一の給へし 133-9)
- すみの江の松に夜ふかくをく霜は (横池一すみよし 140-3)
- かく年月にそへて (横池一ナシ 142-6)
- わたり給ことやうやうひとしきやうになりゆく (横一ほとに、池一程 (やう) に、榊一やうも 142-11)
- さるへきおりもわたりまうてたまふたいのうへにも御たいめむありて (横池陽榊肖一まうて給つゝ、三一給つゝ 143-9)
- あそひたえす (横池陽榊三一たえすあり 147-3)
- さうの御ことはゆるふとなけれと (横池一ゆるう 149-14)
- なと思ひつゝけて (横池一と 168-9)
- はやくまいりたまひね (横池一はやとく、肖一はや 170-11)
- なと仏神にも (横池一と 171-7)
- そのめのとのあねそかのかんの君の御めのとなりければ (横池一ナシ、陽一この 172-9)
- かみほとけ (横大一仏神 175-9)
- かのおほえなかりしみのつまをねこのつなひきたりしゆふへのこともきこえてたり (横一なをかの、池一猶かの 179-2)
- さふらふかきり我もをくれたてまつらしとまとふさまともかきりなし (横池榊一も 184-2)

- ゆめ御宮つかへのほとに人ときしろひそねむ心つかひたまふな（横榊一ゆめゆめ、池一ゆめゆめ 186-14）
- 衛門督きのふくらしかたかりしを思ひて（横池陽肖三一きのふいと、榊一昨日はいと 187-12）
- をとなひたる人めして（横榊肖三一めしいてゝ、池一めしいてゝ 193-3）
- としころへぬる人々たにもさることなきを（横一人に、池一人々に 193-5）
- けに下らうなりともおなしことふかきところ侍らむ（横一ナシ、池一けに 214-11）
- いとなつかしくのたまひつくるを（横池一ナシ、肖一いと 215-12）
- れいのいととおろおろしきゑひにもあらぬを（横池一ナシ 218-4）

三

次に、明融本と横山本の、それぞれの独自異文について触れておきたい。

明融本の独自異文は次の5箇所である。

- いとかくさやかにかくへしや（大横池陽榊肖三・河一さやかに 197-12）

この例のみ、どちらの本文でも良いと思う。

- 二月十よ日とさためたまひてかくにんまひ人なとまいりつゝあそひたえす（大横池陽榊肖三・河別一御あそひ 147-2）

六条院における奏楽なので敬語が必要だろう。

- こことみれと御ありさまにゝたる人はなかりけり（大横池陽榊肖三・河別一ここら 167-11）

「ここと」では文の意味不明。

- 女のためはさらにもいはすわが心ちにもいとあるましきこと（大横池陽榊肖三・河一御ため 181-3）

「女」とは女三宮を指しているので敬語が必要。

- 院のわたらせ給こともいとたまさかになるをつみやきうみたてまつる（大横池陽榊肖三・河別一たまさかなるを、陽一たまさかなるをと、三一たまさかなるをと 191-8）

この文の時点の以前から院（源氏）の訪れは間遠なので、「たまさかになる」という明融本の本文はおかしい。又、陽明家本、三条西家本に従うと、「を」まで女房たちの言葉になり、「を」の後に省略を考えなくてはならない。が、源氏の訪れが間遠であること自体が女房達の不満なのだから、「院の……を」を女房の言葉と考えるのは適当でない。結局、大島本、横山本等が良い。

上に見た通り、明融本の独自異文5箇所のうち、明融本と他本のどちらでも良いのは1箇所のみで、4箇所は明融本の本文は誤りと考えられる。

横山本の独自異文は40箇所ある。そのうち26箇所は、何らかの理由によって、横山本が誤りと判定できる。残りの14箇所は、横山本が誤りと断定はできないが、複数の支持のある明融本を捨てて横山本を採る必要のある箇所はないと思う。

四

これまで検討したところでは、横山本は明融本との間に異文を多く持つが、他本の支持のある異文の6割が横山本と池田本とのみの共通異文であり、しかも、横山本と明融本の本文を比較すると、明融本が正しいと判定できる場合の方が断然多い。若菜下の横山本が明融本との間に異文を多く持つのは、現存定家本以外の定家校訂本の流れを汲むためというより、誤写が多いためと考えた方がよいようである。若菜下の明融本は、横山本に比して格段に良質の伝本と言えるわけだが、明融本をテキストとして採用する場合、これまでに検討した他に、明融本と横山本が一致して他本と対立する箇所も検討する必要がある。そのような箇所は76あり、このうち、明・横以外の他本が良いと判断したのは次の3箇所である。

- しらへいてゝおかしほとにかきあはせはかりひきてまいらせたまひつ（横池一同文、大陽榊肖三・河別一しらへはてゝ 151-9）

「しらべ」は楽器の調子を整えることである。「しらべいづ」も「しらべはつ」も当例以外にはないが、この文の内容から言って、「しらへはてゝ」（琴の調子を合わせ終わって）が正しいと思う。明融本、横山本は片仮名の「ハ」を「い」と誤ったのであろう。

- 身つからの心にはなにはかりおほしまよふへきにはあらねと（大横榊・河一同文、池一おほし（もひ）まよふ、陽三思ひまよふ、肖一思ひまとふ 209-14）

女三宮に対する源氏の詞。「おほしまよふ」の主語は源氏自身なので、敬語を使うのはおかしい。又、「まよふ」は、布、髪、霧、雲、車の往来などに使い、人間については「まとふ」を使うことが多い。源氏物語に「おもひまとふ」「おほしまとふ」は合わせて32例あるが、「おほしまよふ」「おもひまよふ」はこの1例のみである。従って肖柏本の「思ひまとふ」が正しいと思う。

- ことなくてすくすへきひは心のとかにあいなたのみして（横池一同文、大一すくすへきひ比、榊一すくす月（へき）日ころ、陽一すくへき日、肖一すくすへき比、三一すくへき比 218-9）

青表紙本にはすべて助動詞「べし」があるが、この「べし」は、この語の意として普通説かれている、予想、当然、意志、義務、可能等のどの意もあてはまらないように思う。ここに「べし」があるのは不適当なのではな

かろうか。榊原本の訂正前、及び河内本の5本(御物本、高松宮家本、尾州家本、平瀬本、国冬本は「すくす月日」である。これが正しく、青表紙諸本は「つきひ」の「つ」を「へ」に誤ったのではなかろうか。ある期間を意味する「月日」の方が、この文にふさわしいと思う。

以上で明融本と横山本の比較を中心とした若菜下巻本文の検討を終わるが、最後に本稿で指摘し得たことをまとめておく。

一、明融本と横山本との間には異文が多いが、他の青表紙本の支持を受ける異文について、次のような特徴を挙げることができる。

1. 明融本と横山本の異文の6割は、横山本と池田本のみが一致する異文である。
2. 明融本と横山本の異文のほとんどは1, 2字の相異である。
3. 明融本が良いと判定される異文が103であるのに対し、横山本が良いと判定される異文は僅か14である。しかも横山本が良いと判定されるもののほとんどは、明融本の準独自異文(他の青表紙本の一本のみと一致するもの)である。

以上のことから考えると、明融本と横山本との間に、他の青表紙本の支持を受ける異文が多いのは、横山本に誤写が多いため、及び池田本が横山本と密接な関係にあるためであって、横山本が明融本の祖本とは別種の定家校訂本から伝写されたためとは言えないように思う。

二、明融本は横山本よりはるかに良質の本文を持つが、独自異文5箇所のうち4箇所、準独自異文21箇所のうち14箇所、及び横山本と同文のうちの3箇所、計21箇所は、明融本の本文を他本によって訂正すべきと考える。

以上

注

- 1) 片桐洋一「もう一つの定家本『源氏物語』」(『中古文学』昭和55年10月)
- 2) 吉岡曠「青表紙諸本の系統 上・下」(『文学』昭和61年7月, 10月)
- 3) 注2の吉岡論文の調査の方針の一つとして「取り上げる異文は二本以上の共通異文のみとし、一本のみの独自異文は省略する。これは必ずしも煩瑣を避けるための処置ではなく、誤写その他の偶然による異文排除して、より明快に異同状況を把握提示するための方法的処置である。但し独自異文も必要に応じて取り上げる。」とある。妥当な処置と思い、本稿でもこれに従ったのである。
- 4) 松尾聡『古典解釈のための国文法入門』(研究社)
- 5) 丸谷才一・大野晋『日本語で一番大事なもの』(中央公論社)

本稿が成るにあたっては、吉岡曠先生の御教示を賜りました。記して感謝の意を表します。